

学内広報

for communication across the UT



特集：高校生のためのオープンキャンパス2009開催
役員就任・退任の挨拶

2009.8.25

No. 1389

特集

高校生のための オープンキャンパス2009開催

8月6日(本郷地区)・7日(駒場地区)の2日間、『高校生のための東京大学オープンキャンパス2009』が開催されました。オープンキャンパスは、高校生・受験生に大学を公開し、本学への理解を深めてもらうためのイベントで、2000年度より毎年開催されています。今年も全国から多くの高校生が本学を訪れました。当日の様子をご紹介します。

8/6(木) 本郷地区キャンパス



- ① 医学部**
 生命科学の核、それは人間をみる医学です。
- ② 農学部**
 生きものと生きものが生み出す科学の最先端をお見せします！
- ③ 経済学部**
 経済学部では人間や企業の行動など社会現象の分析手法と使い方を学びます。社会科学の延長ではありません。
- ④ 教育学部**
 人が人になるには？学校がつまらないあなたも、本当の教育に触れてみよう。
- ⑤ 薬学部**
 幅広いライフサイエンス研究の最先端の雰囲気を感じ取る。

⑥ 理学部

世界の真理を追い続ける、リガクの匠たちの奮闘をとくとご覧あれ。



理学部では、青いオープンキャンパスTシャツを着たスタッフが高校生を迎えました。写真(上)は「CGで描かれたタンパク質を3Dメガネで立体的に見る」という生物化学科・横山研究室コーナー。写真(右)は、マウスを使って「嗅覚の仕組みの研究」を解説していた生物化学科・坂野研究室コーナー。他にも興味深い企画が目白押しでした！



青森県立三本木高校の3人娘。キャンパスの建物を見て、「すごい。赤レンガ造りが北海道っぽくていいかんじー」と言っておりました。

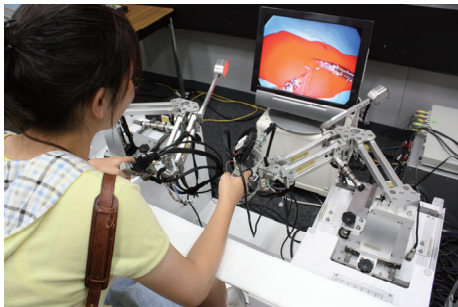


大分からやってきた県立上野丘高校の3人組。学校で60人のツアーを組んで参加したとのこと。「今、素粒子に興味がある」そうです。



⑦ 工学部

工学指数上昇中:あなたの視野と未来を拓く工学部へようこそ!



機械工学科の光石・杉田研究室「手術支援ロボット」体験コーナー。モニターを見ながら、遠隔操作で精密な手術ができてしまうのです!



IRT拠点のデモンストレーション、ホームアシスタントロボット。家庭での掃除や片づけをしてくれるロボットです。これは商品化が待ち遠しいですね。



工学部2号館ラウンジで人々の目を引いていた、高齢者支援用の「パーソナルモビリティ(一人乗り自動ロボット)」。セグウェイのように二輪で移動。

⑧ 現役学生による東大ガイダンス

現役東大生とのフリートークを通して、多様な東大生を感じてください!



⑨ キャンパスツアー

現役東大生ツアーガイドが本郷キャンパスの見所を案内します。



⑩ 女子学生コース

現役女子学生や卒業生に大学生活の話聞いてみましょう!



(男女共同参画室企画)

⑪ 法学部

『法』と『政治』を舞台とした知の躍動:君も体験しよう、法学部スタッフが誘う意外に身近な世界。



法学部の文献・資料展示。『滑稽新聞』など、明治新聞雑誌文庫所蔵の宮武外骨作品もありました。

⑫ 文学部

文学部、それは人間から生まれたすべての言葉、音、かたちと向き合う場所



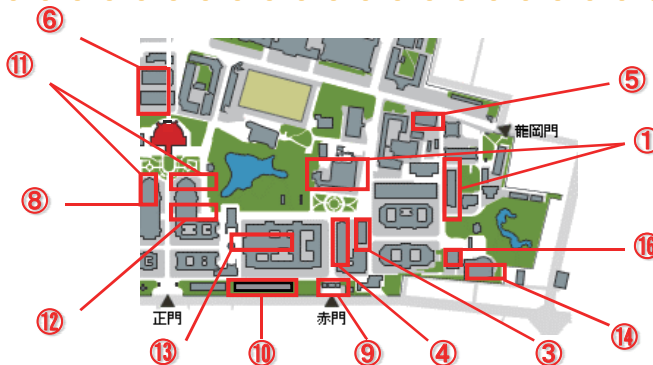
教員著書展示コーナーと、現役学生による質問コーナー。文学部スタッフはピンクのお揃いTシャツを着用して高校生に対応。



山形東高校の2人は木蔭でランチの最中。総合研究博物館の展示に感動したそうです。東大に対するイメージを聞くと、「巨大かな。古くてどっしりしてる」とのこと。



渋谷教育学園幕張高校の6人。理系4人は「他大学より実験室が広い」と、文系2人は「伝統を感じる。入学したくなった」と、それぞれ感想を述べてくれました。



8/7(金) 駒場地区キャンパス

8月7日(金)には駒場地区でオープンキャンパスが開催されました。駒場地区のオープンキャンパスは、教養学部・総合文化研究科を中心として、数理科学研究科、生産技術研究所(生産研)と先端科学技術研究センター(先端研)の4部局で企画されました。インターネットでの事前登録では、申込みを開始したその日のうちに受入定員をオーバーし、登録申込を早々に締め切らなければならないほどの人気でした。当日は朝から晴れ渡り、日中の最高気温は33度にも達するという猛暑の中のオープンキャンパスとなりましたが、事前登録および当日受付を含めた参加者総数は過去最高の2,252名を記録しました。駒場地区総合受付が設置された駒場Ⅰキャンパス正門には、午前8時に行列ができて始め、9時の時点では坂下門近くまで参加者の列が伸びたため、9時30分の受付開始を前倒して、9時に受付をスタートさせました。午前中は、教養学部の3つの大教室を使って主企画

であるキャンパス紹介、教員との談話会が並行して行われ、午前中の最後には、総合文化研究科教員による2つの総合講演が実施されました。また、コミュニケーションプラザ2階では、駒場友の会による父母・引率者を対象としたキャンパス紹介も行われました。約1時間の昼休みのあと、8つの模擬講義(文系3コマ、理系3コマ、文理融合系1コマ、数理科学研究科1コマ)と4つの実験デモ(物理実験、化学実験、生物実験、低温実験)が開講され、多くの高校生が模擬講義や実験デモに目を輝かせていました。午前、午後を通じて、駒場博物館、駒場図書館、情報教育棟、および生産研、先端研の各施設における施設見学、ガイドツアー、特別企画等が並行して実施され、たくさん的高校生でにぎわっていました。特に、現役東大生の先輩たちとの質問コーナーでは、受験勉強やキャンパス生活について、高校生が先輩たちと熱心に話し込んでいた姿がとても印象的でした。



⑬ 総合図書館

歴史ある総合図書館で東大生気分を味わおう！『万葉集』関連の資料展示も開催。

⑭ 総合研究博物館

特別展示「鉄—137億年の宇宙誌」を開催しておりますので、是非ご来館ください。

⑮ 地震研究所

地震・火山現象の理解と災害軽減に関する研究の紹介をおこないます。

⑯ 東洋文化研究所

アジアの政治・経済・社会・文化の総合研究所。来られ！世界の未来はアジアから。

⑰ 分子細胞生物学研究所

生命現象の謎を分子細胞レベルで分かり易く講義します。

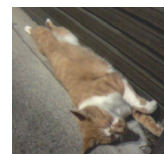


岩手県立大船渡高校の2人。理学部の様々な企画を見学してきたそうです。「とにかく東大は施設がすごい！」と驚いておりました。



長崎県の私立青雲高校の6人組。経済学部の模擬講義を受けたそうです。感想を聞くと、「東大キャンパスは時間の流れがゆったりしてますね」とのこと。たしかにそうかも。

今年も無事終了。大挙して詰めかけた高校生・受験生の熱気に、ネコもタジタジの様子。ちなみに今年の参加者数は本郷が約7,200名、駒場が約2,200名でした。皆様、ご協力ありがとうございました！



平成21年7月13日付で辰野裕一理事が退任され、7月14日付で久保公人事事が就任されました。就任・退任の挨拶を以下に掲載します。



理事
久保 公人

(担当) 人事・労務、事務組織、業務改善、

男女共同参画

(任期) 平成21年7月14日～平成22年3月31日

- 昭和55年 京都大学法学部卒
- 昭和55年 文部省入省
- 平成13年 文部科学省初等中等教育局施設助成課長
- 平成14年 同 高等教育局主任大学改革官
- 平成15年 同 私学部私学行政課長
- 平成16年 同 生涯学習政策局政策課長
- 平成17年 同 生涯学習総括官
- 平成18年 同 大臣官房人事課長
- 平成19年 同 審議官(高等教育局担当)
- 平成21年 東京大学理事

役員就任の挨拶

就任に当たって一濱田総長の下で森を動かして

辰野理事の後任として、このたび理事に就任いたしました。辰野理事同様人事・労務、事務組織、業務改善、男女共同参画を担当します。

私自身これまで、国立大学の予算・組織・機構(教養部改革、大学院重点化等)、医学教育の振興、法科大学院の創設、大学設置基準の大綱化・弾力化、認証評価制度の創設、私立学校法の全面改正、公立大学の経営(北九州市での学術・研究都市作り)等、国・公・私立大学の制度全般に幅広く携わり、大学制度改革の様々な節目に立ち会ってきました。

大学自らが改革しやすい土壌を作り大学自らによる大学改革を推進することによって大学の教育研究の質の向上を図り、大学に対する公的資金投入についてのコンセンサスを得るという目的で国レベルでの様々な施策が実施されてきました。しかしその狙いが、国家財政の逼迫、規制緩和等の流れ等の中で紆余曲折をたどりつつ、時として翻弄されてきたという流れの中にあつて、東京大学としては模索しながらも絶えず適切な選択を続けてこられました。

国立大学の法人化が二期目を迎える時期になりました。法人化にはもちろんメリット、デメリットがあります。しかしながら、この少子化、高齢化社会の中、わが国の構造そのものの在り様が問われている状況下で、東京大学がこの法人化をむしろ積極的に活用し、世界に伍していくと同時に、わが国の大学を牽引していく役割を果たしていくためのシステムづくりを目指す好機とも考えます。

「教員、職員、学生、みんなすばらしい力をもっているわけだから、それを引き出すことが総長として一番必要なことだと思います」と濱田総長がおっしゃっておられることが、東京大学の組織が有機的に機能するための基本だと思えます。そのために、私としても様々な方のご意見や考えを伺いながら、世界を担う知の拠点としての東京大学の大きな発展のため、その職責を全うしていきたいと考えています。よろしく願いいたします。

役員退任の挨拶

東京大学の皆様へ

文部科学省大臣官房政策評価審議官(前 本学理事) 辰野 裕一

7月13日、東京大学理事の職を離れることになりました。皆様方には本当にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

あつという間に過ぎた2年間でしたが、この間、創立130周年の記念行事や総長選挙というなかなか巡り会うことのできない機会にも際会し、思い出深い充実した日々を過ごさせていただきました。

7月14日からは、文部科学省大臣官房政策評価審議官の職に就いています。先行きの不透明な時代ですが、このようなきこそ、揺るぎない信頼される教育行政が求められると思えます。大学の現場での貴重な経験を生かし、皆様方とタッグを組んで様々な課題に取り組んでいきたいと

願っています。

映画「カサブランカ」のラスト・シーン、ハンフリー・ボガード扮するリックの最後の台詞、「Louis, I think it's the beginning of a beautiful friendship. (レイ、これはわれらの美しい友情の始まりだと思うよ。)」のように、まさにこれからが始まりです。今後とも(今後こそ!)どうぞよろしく申し上げます。

なお、私の部屋は、虎ノ門の文部科学省庁舎の10階にあります。どうぞお気軽に立ち寄りください。カバンを置くスペースも用意してありますので、文部科学省内出張所として御活用いただければ幸いです(不在の場合でも、秘書に言っておりますので、自由にご利用ください)。

NEWS

一般ニュース

本部国際企画グループ

「潘基文国連事務総長と学生とのタウンミーティング」開催される

一般

7月1日（水）小柴ホールにおいて、潘基文国連事務総長と学生とのタウンミーティングが開催され、本学学生等約160名の参加があった。

タウンミーティングでは、田中明彦理事（副学長）の歓迎挨拶の後、潘基文国連事務総長が「United Nations: Facing Today's Global Challenges」と題した講演を行い、その中で気候変動問題、核不拡散、経済危機、国連改革など、多岐にわたる話題に触れた。また、講演後、学生との質疑応答が行われ、事務総長はさまざまな質問に丁寧に応対され、盛況のうちに終了した。



講演を行う潘基文国連事務総長



質問を行う学生

本部環境安全グループ

「安全講演会」、開催される

一般

7月3日（金）本郷キャンパス小柴ホールにおいて、本学安全の日を記念して安全講演会が開催され、約200人が参加した。

本年7月4日は八丈島にて農学生命科学研究科の山下高広氏が潜水作業中に殉職する事故が発生してから4年となる。本学では7月4日を全学安全の日と定め（講演会は7月3日に開催）、事故の記憶を風化させることなく、教育研究活動における安全衛生の向上、事故災害の発生防止、安全意識の向上、安全文化の定着に取り組むことが新たに決意された。

冒頭、濱田純一総長より「昨年来の農場に於ける農業管理問題に示されるように、至らないところが極めて多い。本学の安全管理のありかたについて再度根幹から見直し、社会からの信頼を回復しなければならないと痛感している。」との挨拶があった。

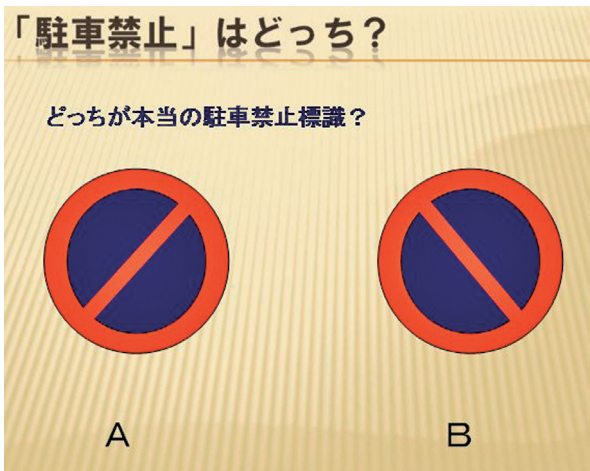
今年のテーマは、「ヒューマンエラー」（事故原因となる人間の過誤（ミス）を考える）であった。立教大学の芳賀繁教授による第1部では、エラーが起きる人間のメカニズムについて実技を交えながら体験し、その対策についてさまざまな角度からの分析があり、今後どう大学の安全衛生に反映させたらよいかなどの質疑応答が行われた。また第2部では工学系研究科の中尾政之教授、農学生命科学研究科の吉川泰弘教授より東大内の事故タイプ別集計の紹介、実際の事故事例の紹介と状況分析、実際の再発防止に向けた取り組みについて講演及び質疑応答が行われた。



総長による冒頭挨拶



文字を書いてエラー体験中の参加者



みなさん、どっちかわかりますか？

地球観測データ統融合連携研究機構

第3回データ統合・解析システム (DIAS) フォーラムを開催

一般

7月8日(水)武田先端知ビル5階、武田ホールにて、第3回のDIASフォーラムが開催された。折しも第3期科学技術基本計画の中間フォローアップがまとめられた時期と重なり、今回のフォーラムでは、DIASの革新的データ基盤技術開発を元に、分野間連携の促進、科学知

の創造と国民目線での公共的利益的創出、さらには、科学技術外交への貢献を目指して、関連の府省及び機関の専門家によるパネルディスカッションを開催することで、DIASにおける今後の開発の方向性について議論が行われた。

当日は、観測データや数値予測情報の保有・提供機関、DIASの開発関連機関、および本システムにより提供される統融合情報の利用者(ユーザーサイド)から、DIASの研究に直接関心を寄せてくださる皆様にご参加いただき、全体でおよそ120名のご出席があった。

13時からの開会式では、まず、本学の松本洋一郎理事(副学長)よりDIASの研究推進について激励のお言葉とともに、開会のご挨拶をいただいた。続いて、ご来賓として、総合科学技術会議の相澤益男議員からは、「DIASが多種多様な地球観測データを統合することによって、新たな知を創出し、それを公共的利益的につなげていくということにもっとも関心をおいている」とのご挨拶をいただいた。文部科学省大臣官房の田中正朗審議官からは、「気候変動の影響評価、緩和策、適応策への取り組みに対して、DIASのシステムが、府省連携の共通のプラットフォームとなり、精度の高い情報を発信していくこと、気候変動に向けた本格的な第一歩となることを祈願する」とのお言葉を頂戴した。



松本洋一郎理事(副学長)のご挨拶



相澤益男議員のご挨拶



田中正朗審議官のご挨拶

プログラム中盤の15時から、会場ロビーにて、「DIAS利用研究から見た連携の可能性について」というテーマで、30枚の研究紹介ポスターが掲示され、参加者と研究者のあいだで、歓談しながらのポスターセッションがあった。また後半15時50分からは、特別セッション「連携による科学知と公共的利益的の創出を目指して」が行われた。連携を目指す府省・機関の代表者と、DIAS研究開発側の代表者を合わせて、13名のパネリストにご登壇いただいた。そして、各機関からのDIASへの期待などを語っていただき、進行役の小池俊雄機構長からは、次のような四つの視点が示され、さらに議論が続いた。

1. 分野連携をどう戦略的に推進するか?
2. 観測、予測、それを政策決定に至るまで、人々がうごく、つなぐシステム
3. プロトタイプから実用化へ展開するときの戦略
4. 国際貢献

会場からは、「連携の難しさ」について、日米の国民性の違いから見た質疑応答がなされるなど、たいへん興味深い議論が続き、盛況のうちに閉会した。



パネルディスカッションの風景

尚、本フォーラムについて、ご興味をお持ちの方は事務局へご連絡ください。次回のご案内をお送りいたします。当日の発表内容など詳細は、DIAS ホームページに随時更新され、ご覧いただけます。

<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/dias/>

問合せ先：EDITORIA 事務局

03-5841-6132 内線 26132

海洋アライアンス

第4回東京大学の海研究「海の現在と明日」開催される

一般

7月14日（火）弥生講堂にて、海洋アライアンスシンポジウム・第4回東京大学の海研究「海の現在と明日」が開催され、学内外から300人以上の参加者が集まった。

今回のシンポジウムでは、「海の研究最前線」「海を取り巻く諸問題」「明日の海洋学をめざして」という3つ

のセッションと、「総合討論」の4部構成で行われ、海洋アライアンスならではの幅広い研究・教育活動についての発表があった。

開演に先立ち、浦環機構長があいさつを述べ、同時に海洋アライアンスの活動内容も紹介した。

「海の研究最前線」では、九州西方沿岸域を襲う巨大波「あびき」の発生メカニズムやメタンハイドレートの資源としての可能性、地球温暖化が海にもたらす影響についての発表があり、参加者から多くの関心を集めた。「海を取り巻く諸問題」では、水没の危機にある沖ノ鳥島を維持する取り組みや日本型海洋保護区の特徴とその国際的な位置づけ、さらには海賊対策の現状と法的対応といった多岐にわたる発表が行われた。

「明日の海洋学をめざして」では、音響映像による水中生物の観測技術や「バイオロギングサイエンス」*といった最先端研究が紹介された。また子供たちを対象とした、白鳳丸見学ツアーや実習の様子も紹介された。



シンポジウムの様子

最後に以上の3セッションを踏まえた総合討論が行われた。参加者から多くの質問や感想・意見が寄せられ、海洋研究に対する関心の高さを窺うことができた。

海洋アライアンスのイベント・活動情報はホームページをご覧ください。

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp>



質疑応答の様子

* 計測機器を海洋動物に装着して水中行動と環境の情報を把握し、海や海洋動物の未知の世界を総合的に理解するシステム科学



本部留学生支援グループ

平成 21 年度第 1 回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」が開催される

教職員ならびに卒業生の方々からの寄附金で運用されている「外国人留学生支援基金」は、平成 21 年度第 1 回奨学生（奨学金月額 5 万円／支給期間：平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月）として 20 名の留学生を採用し、7 月 14 日（火）に奨学生証書授与式を開催した。



謝辞を述べる方乙晴さん

式は、田中明彦理事（副学長）（留学生支援基金運営委員会委員長）、小島憲道理事（副学長）（同委員会副委員長）及び坂野仁留学生センター長（同委員会副委員長）の臨席の下、田中理事（副学長）から奨学生に証書が授与され、「本奨学金は教職員、卒業生の方々からの寄附金から支給されるものである。優秀な留学生の皆さんには、研究・勉学の成果を期待している」との挨拶があった。その後、奨学生を代表して大学院人文社会系研究科修士課程の方乙晴さん（中国）から、「一度社会に出てから、やはり学びたいという気持ちを抑えきれず留学し、経済的に苦しい中、奨学金のお陰で学業に専念することができるようになった。皆さんの期待に応えることができるよう頑張りたい」との謝辞が述べられた。

なお、本奨学金受給者は、前身の外国人留学生後援会から通算して今回で 290 名となった。ここに本基金の趣旨にご賛同いただいている皆様のご支援に対し、改めて御礼申し上げる次第である。



東京大学外国人留学生支援基金
平成21年度第1回奨学生一同



学生相談ネットワーク本部

第3回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を開催

平成 21 年度第 3 回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会が、7 月 15 日（水）に柏キャンパス柏図書館メディアホールにおいて開催された。

本講習会は、平成 20 年 4 月に発足した学生相談ネットワーク本部の活動の一環として、平成 20 年度から実施されている。

亀口憲治企画室長の挨拶の後、学生相談ネットワーク本部精神保健支援室の大島紀人講師による講義「メンタルヘルス講義」、亀口企画室長及び学生相談所の高野明講師ら教員による演習「学生対応の演習」が行われた。参加者 34 名（7 部局、教員 11 名、職員 23 名）は熱心に講習に取り組んだ。質疑応答も活発に行われ、学生対応への関心の高さがうかがえた。

なお、より多くの教職員に参加していただきたい趣旨から、今年度は、新たに白金キャンパスも加え、今後は以下のとおり開催する予定である。

【今後の実施日程】

白金キャンパス 10 月 22 日（木）

本郷キャンパス 10 月 28 日（水）



大島講師による「メンタルヘルス講義」



学生相談所の教員による、紙粘土を使用した「学生対応の演習」

海洋アライアンス
第5回イブニングセミナー開催

一般

7月22日(水)、本郷キャンパス工学部3号館において、第5回イブニングセミナーが開催された。今回は「海洋教育」をテーマに、北澤大輔准教授(生産技術研究所)と長濱幸生特任助教(アジア生物資源環境研究センター)を講師としてお招きした。

- ・海洋教育のすすめ
北澤大輔准教授
- ・ガラパゴスの海洋教育
長濱幸生特任助教

北澤准教授は、自身が参加している海洋教育活動や海洋教育の現状について紹介した。日本は四方を海に囲まれた海洋国家でありながら、一般市民の海や船に関する知識・関心は必ずしも高くはない。北澤准教授は「このような状況を改善することは海事に関わる者の務め」として、一般市民向けの講演会の様子やわかり易さに配慮したホームページを運営している。さらに今後、現在の活動を継続すると同時に他団体との連携を深めていきたいと意欲を述べて締めくくった。

続く長濱特任助教は、JICAの海洋保全プロジェクトでガラパゴス諸島に赴任した際に関わった海洋教育について講演した。ガラパゴス諸島が海洋保護区であるが故に、住民と海との間に距離があることや移民増加による環境汚染・資源枯渇の現状を述べ、貴重な海洋生態系や環境を守るためにも、住民への教育が不可欠であると指摘した。また実際に住民を対象とした授業の様子を紹介し、「このような活動が海との関わりを考えるきっかけになり、興味を持つ人が増えれば」と希望を語った。

質疑応答では、実際に海洋教育を受けたことがある学生や、携わったことがある学生などの積極的な発言が目立ち、若い世代の関心の高さが窺われた。

次回のイブニングセミナーは9月14日(月)18時から開催されます。詳しくは海洋アライアンスのホームページをご覧ください。多くのご参加をお待ちしています。

海洋アライアンス ホームページ：
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp>



イブニングセミナーの様子

本部環境安全グループ
「安全衛生パトロール」実施される

一般

7月22日(水)、農学部3号館・動物医療センター・生命科学総合研究棟において、松本洋一郎理事(副学長)が、山田一郎副学長、生源寺眞一農学生命科学研究科長とともに安全衛生パトロールを実施した。

役員によるパトロールの目的は、本学の安全衛生に対する姿勢を自ら示すことにある。

当日は、役員をはじめ環境安全本部、生源寺農学生命科学研究科長ほか農学部安全衛生管理室等が、研究室、薬品庫等を点検した。



実験機器の安全使用についての意見交換



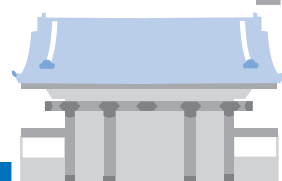
ボンベの固定状況をチェック!

担当教員から研究内容の説明を受けた後、実験機器の安全な使用、保護具の着用、薬品の保管状況、電気配線の状況、ボンベや棚の固定などについて現状をつぶさに見て回り、棚の転倒防止策・高温物取扱い時の手袋利用の徹底など研究室独自の工夫も検分した。

点検後、松本理事（副学長）から「安全の確保については風通しを良くし、同じ意識で相互に見合うことが必要である」等の講評がなされた。

なお、各部局においても部局長による安全衛生パトロールが順次実施されており、安全衛生管理の実態の把握・改善に取り組んでいる。

部局 ニュース



大学院法学政治学研究科・法学部、大学院公共政策学教育部

留学生見学旅行を実施

部局

6月4日（木）・5日（金）の2日間、法学政治学研究科、公共政策学教育部合同で留学生の伊香保温泉見学旅行を実施した。参加者は、留学生26名、引率の教職員5名の計31名であった。

集合はほぼ時間通りで、出発予定時刻9時に大型バスで本郷キャンパスを出発できた。天候は梅雨入り間近の曇り空だったが、みんなの気持ちは晴れ渡っていた。

午前中、水澤観世音を見学し、昼食には日本三大うどんの一つと言われる「水沢うどん」を食べた。

次に訪れたのは、創作こけし工芸館「卯三郎こけし」。指導員による説明の後、全員で栓抜きとしても利用できるこけしの絵付け体験をした。絵付け体験が、旅行中一番印象に残ったという学生が多く、作品は大切な思い出の品となった。

さらに、榛名湖で遊覧船に乗ってから、創業1576年の老舗温泉旅館に到着した。夕食は群馬県産品づくりの豪華な和食膳だった。夕食後は恒例の懇親会でゲームを3つ行い、2時間ぐらい親睦を深めた。しゃべり足りない人たちは、宴会部屋に集い、温泉を楽しみにしていた人は、温泉風呂に向かっていった。

翌朝は、9時にホテルを出発し、手作りガラス工房「ハルナガラス」と「おもちゃと人形自動車博物館」を見学した。博物館内の昭和レトロパークが人気だった。帰りの交通も順調で、予定どおり16時30分ごろ大学に到着し、全員笑顔で解散した。

参加者に旅行のアンケートを取ったところ、印象に残ったことは、こけしの絵付け体験が一番多く、次に、温泉と続いた。日本の文化財を見学し共通の体験を通じて親睦が深まり、楽しく有意義な時間を参加者全員で共有することができた。



水澤観世音での集合写真



こけしの絵付け体験



懇親会での一場面、人文字「足」

大学院工学系研究科・工学部、大学院情報理工学系研究科

工学系等地震訓練が行われる

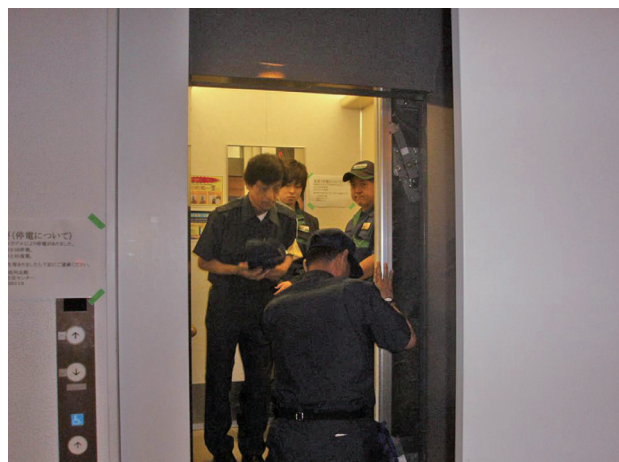


6月22日(月)昼休みに、工学系等(工学系研究科、情報理工学系研究科、工学部、VDEC、IML)において地震訓練が実施された。天候が心配されたが、曇天の中、訓練は全員参加で行われ、教職員、学生など2800名の参加があり、授業中の学生も教員の引率で訓練に参加した。



工学部2号館避難場所

工学系等地震訓練は平成11年度から毎年度行われており、今回で11回目の実施となる。今年度の訓練にあたっては、理学部7号館へ工学系等本部から一斉放送を行えるよう設備化したことにより、理学部7号館に在居する情報理工学系の構成員の訓練への参加が実現した。新しい試みとして、地震によるエレベータ停止・閉じ込めを想定し、エレベータ会社の協力の下、工学部11号館エレベータにて防災センター員による救出訓練が実施された。



工学部11号館エレベータ救出訓練

今回の訓練では、突発地震発生時の対応行動訓練を目的とし、初期対応→緊急対応→避難→安否確認、という地震発生時の対応マニュアルに沿った行動が、号館対策部(各建物の対策本部)と工学系等対策本部の間で連絡を取りながら進められた。

「訓練地震発生!」という一斉放送により、11時40分に訓練が始まった。まずは初期対応として、身の安全の確保、火の始末、避難路の確保などを行い、その後、工学部列品館に災害対策本部、各号館に対策部がそれぞれ設置され、緊急用PHSを用いて各建物と災害対策本部との連絡が開始された。さらに、各建物で被害想定(薬品漏洩や火災、けが人の発生など)に応じて緊急対応をとりながら、建物ごとに指定された避難場所に避難を行った。この間、号館対策部は災害対策本部に逐次状況を報告し、災害対策本部では連絡を受けた内容を記録班

員がボードに記入することにより、全体の状況を把握した。避難完了後は、各避難場所で、工学系等の全構成員が携帯している安全カードを用いた安否確認が行われ、訓練が終了した。訓練の一連の状況は、その場で大学本部に報告された。

訓練終了後は、本部長の保立和夫工学系研究科長、避難行動の専門家の関沢愛教授（都市工）、地震対策担当専門委員の塩原等准教授（建築）、東京消防庁本郷消防署の田中徹予防課長補佐の講評が一齐放送で参加者に伝えられ、中尾安全衛生管理室長の挨拶で地震訓練が締めくくられた。



保立研究科長による講評

今回は、備蓄していた賞味期限の近いカンパン 2400 缶の配布を訓練終了後に行い好評であった。地震時の対応を全員で実地訓練でき有意義であったが、一齐放送設備の不備、PHS による連絡での混乱、シナリオに依らない訓練の必要性などの問題点や意見が報告されているので、来年度以降の課題としたい。



好評だったカンパン缶の配布

史料編纂所



ロシア国立海軍文書館長を招いて国際研究集会を開催

7月1日（水）、史料編纂所（加藤友康所長）では、ロシア連邦サンクトペテルブルグ市からロシア国立海軍文書館長らを招聘し、「日露関係史料をめぐる国際研究

集会パート2」を開催した（日本学士院との共催）。

研究集会では、ワジム・クリモフ教授（サンクトペテルブルグ国立大学）から文久遣欧使節団に対するロシアの外交的準備について、次いで、ロシア国立海軍文書館マリナ・マレヴィンスカヤ副館長から、日露戦後期の海軍駐在武官ヴァスクレセンスキー大佐と日本における活動についての報告があった。

最後に演壇に立った海軍文書館チェルニャフスキー館長は、同館が所蔵する貴重史料 1.8 万ファイルのヤルトロフスク市（西シベリア）への疎開と復帰について報告した。1962 年のキューバ危機により、核戦争の勃発を危惧したソ連邦（当時）は、1969 年、5 つの連邦文書館から膨大な貴重史料をヤルトロフスクの史料保存庫へ運び込んだ。この史料群が 40 年ぶりにもとの文書館に復帰しつつあり、海軍文書館がその第 1 号となった。館長のお話では、復帰した史料群は 60 のフォンドで構成され、中には艦隊司令官官房の議事録や日誌が含まれ、18～19 世紀の北太平洋・日本海域で活動したロシア艦の記録も含まれているのだという。

この疎開史料群については、ロシア国内でもその存在すら全く知られていなかったため、この日の討論は大いに盛り上がり、史料に基づいて議論ができる平和のありがたさをあらためて確認する 1 日となった。

研究集会は、日本学士院による国際学士院連合関連・日本関係未刊行史料調査事業の一環として行われた。文書館長らは集会に先立って、プロジェクト代表者の保谷徹教授とともに日本学士院を訪問し、久保正彰院長（本学名誉教授）と親しく懇談した。また、集会終了後は、長崎歴史文化博物館を訪れ、同館が所蔵する日露関係史料の調査をおこなうなど、研究交流につとめた。



報告するチェルニャフスキー館長（東文研会議室にて）



長崎・悟真寺のロシア人墓地を調査する一行



本館1階玄関ホール

大学院農学生命科学研究科・農学部

農学生命科学図書館本館リニューアルオープン

農学生命科学図書館本館は、耐震改修工事及び退避していた資料の搬入が終了し、7月13日（月）にリニューアルオープンした。これに先立ち、当日9時30分より古田元夫附属図書館長、工事関係者、生源寺眞一研究科長、本間正義館長ほかの出席のもと式典を行った。



テープカットを行う古田附属図書館長（左）と
生源寺農学生命科学研究科長（右）

工事は耐震補強だけでなく、スペースの有効活用を図るため3階の旧事務室・館長室をPC端末室・閲覧室・ゼミナール室へ改修し、また事務スペースを集約させ、1・2階のメゾネット方式とした。

併せてバリアフリーを目指し、多目的トイレ、エレベーター、スロープを新設した。

1階の内装（腰壁）には本研究科附属北海道演習林から産出した樹齢約200年のマカバ材を使用し、穏やかな空間を創出している。

大学院総合文化研究科・教養学部

日韓合同セミナー開催

7月14日（火）～16日（木）の3日間、総合文化研究科の院生とソウル大学の院生が集うセミナーが駒場Iキャンパスで開催された。この日韓合同セミナーは、2006年以来毎年開催されており、今年が4回目となる。プログラムがますます拡充され、日本の国際貢献や政治・経済の制度、日韓両国が直面している社会的な問題や環境問題等、幅広いテーマのセッションが用意された。両大学の院生たちは、総合文化研究科の6名の教員によるオムニバス形式の講義をともに聴講し、議論を通じて理解を深めあった。



熱心に講義を聴くセミナー参加者

本セミナーは、ソウル大学校日本研究所が主催する日本研修プログラムの一環として行われたものである。ソウル大学校からは国際大学院を中心に、さまざまな専攻

の院生 15 名が来日した。総合文化研究科からは、3 日間で延べ約 40 名の院生が参加し、講義の時間だけでなく昼食時間等も利用して、非常に活発な交流が行われた。



参加者による記念撮影

(写真撮影：黒木サオリ)

医学教育国際協力研究センター

部局

第 4 回学生のための国際協力ワークショップを実施

アフガニスタンの医師 12 名と日本の学生約 40 名が、アフガニスタンの保健医療人材育成についてともに学び、ともに考える場として、「第 4 回学生のための国際協力ワークショップ」が、日本国際保健医療学会・学生部会との共催で、7 月 18 日（土）に医学教育研究棟で開催された。

アフガニスタンでは、内戦によって大学病院を含めた医療施設が破壊され、医療従事者の多くが国外流出した。そんな中、2005 年より、日本の政府開発援助（ODA）によって「JICA アフガニスタン国医学教育プロジェクト」が始まり、総合医の育成の支援をしてきた。その一貫として、今年 7 月から 8 月にかけての 1 ヶ月半、アフガニスタンの医師 12 名が来日して当センターで研修を受け、その研修プログラムの一つとして、本ワークショップを実施した。

ワークショップでは、まず初めに、カブール医科大学のナスリ・モハマド・イドリース講師が、アフガニスタンの保健医療と教育の現状について講演を行った。また、当センター大西弘高講師が、これまで医学教育専門家として現地を 8 回訪れた経験を踏まえつつ、アフガニスタンの保健医療のニーズと課題について講演を行った。

続いて、アフガニスタンの医師と日本の学生が、7 つの混成グループに分かれ、アフガニスタンで平等な保健医療サービスを提供するための問題について分析し、発表を行った。さらに、アフガニスタンが実際に直面している課題として、「女性の医療者不足」、「教育機関や医療機関がない州での保健医療サービスの提供」の 2 つに

対し、グループごとに解決方法の検討を行い、発表を行った。アフガニスタンの医師の意見を聞きながら、解決に向けた提案を一緒に考えていくプロセスは、日本の学生にとって非常に有意義な経験であったと思う。

アフガニスタンの医師への研修は、今年度から 3 年にわたり年 2 回行われ、今回は今年 11 月に行われる予定である。



グループワークの様子



学生からの質問に答えるアフガニスタンの医師

INTERVIEW

サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S)

住 明正 教授

地球持続戦略研究イニシアティブ (TIGS)

統括ディレクター

今ご紹介するのは、2005年7月に設置されました「サステナビリティ学連携研究機構(IR3S)」の住明正先生です。当機構は12大学・機関の強固な連携で研究を推進しており、それぞれが有する高い学術的ポテンシャルを有機的に連携することによってサステナビリティ学を追究し、学問領域として確立し発展させることを目的としています。今年で5年目を迎え、更なる発展を目指して邁進する、今注目の機構です。

Q. サステナビリティ学が目指すものとは？

住 サステナビリティ学とは、国際社会が抱える環境問題、社会経済問題などの喫緊の課題を解決し、地球社会を持続可能なものへと導く地球持続のためのビジョンを構築するための、その基礎となる新しい超学的な学術のことです。



現在、人間社会が抱えているこのような問題は、大学従来の学部、研究科といった縦割りの専門分野では解決することが出来ません。例えば温暖化問題ひとつを取っても、気象や経済、さらに国際関係など、様々な学問によってその問題を考えなければなりません。また、こうした問題解決には新しい学問体系の導入が不可欠と言えます。そうした学問体系の構築を学術分野を超えた多様な学問を融合させて実現していくことがサステナビリティ学が目指すところであると言えます。

Q. これまでの活動について

住 IR3Sは参加12大学・機関により構成され、その連携により温暖化対策や循環型社会形成等に関する文理融合の研究や、教育プログラムを推進、発信してきました。中でも、サステナビリティ学構築の場として国内外で高い評価を得ている国際学術誌「Sustainability Science」の刊行、国内向けフリーペーパー「サステナ」の刊行など、アウトリーチ活動にも積極的に取り組んでいます。また学内外においてシンポジウムを多く開催し、毎回大学関係者だけでなく一般の方にも多く参加いただいています。

さらに、昨年、「サステナビリティと大学の役割」のテーマの下に開催されたG8大学サミットではIR3Sが中心となり、「札幌サステナビリティ宣言」として、グローバルな国際ネットワークの形成の必要性を謳ったコンセプトを、世界に向けて発信することができました。このように、今後も日本から世界に向けた戦略的な発言を積極的にしていく予定です。

Q. 今後の課題は何ですか？

ホームページも
ご覧ください！

住 今までの活動によって研究者同士のネットワークが確立出来たかと思っていますが、具体的にどのような成果が出たのか、という問いに答えるのは難しいでしょう。例えばサステナビリティという言葉が日本においても浸透してきた実感はありますが、目に見える成果についてはなかなか言及することができません。今まで多くの議論がなされ、知識の整理、構造化の上で共



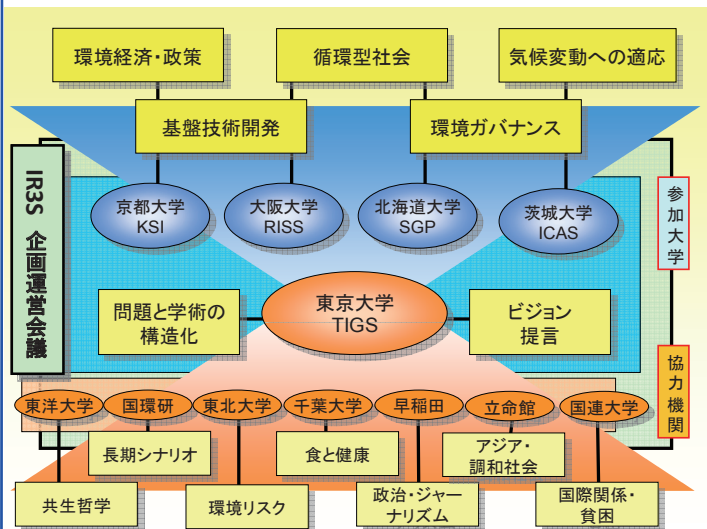
総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。

総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

通認識を得ることは出来たように思いますが、これからはさらに次のステップとして、具体的な行動を起こしていく時期に来ています。

しかし、具体的な行動を起こすということは容易ではありません。もちろん「サステナブルキャンパス」といった試みなど、実際に成功した事例もありますが、こうした活動は大学の内部に留まっているのが現状です。外部に向けた、例えば行政に対する政策提言となると、価値観やそれぞれの立場、利害が関わってくるため、東京大学全体で何か提言するということが非常に困難なものになります。今後は大学として、具体的にどのような行動をしていけるのかを考えていく必要があると思います。



Q. 今後の抱負について

住 これまでに築いてきた、先進国とアジア主要地域における大学間のメタ・ネットワークをさらに拡げていこうと思っています。サステナビリティは一国の問題ではなく、地球規模の問題です。IR3Sでは現在までもNNs(Network of Networks)に取り組んできましたが、今後もこれを継続し、統合的研究教育ネットワーク形成を通じてサステナビリティ学の国際的体系化を目指します。またこの研究成果を教育に反映し、次世代のサステナビリティを牽引する人材を育成するなど、IR3S/TIGSはこのメタ・ネットワークの中核的拠点(ハブ)として機能を強化し、研究者同士が自在にやり取りできる仕組みを構築していきたいと思っています。

一方で、研究者が自発的に集まれるような新たなネットワーク作りも進めています。今の大学は資金の獲得のために行動を起こすということが多くなっていますが、本当に重要なのは志です。志をひとつにする研究者が集まり、そこから何かが生まれてくる、そういう夢を語れるような雰囲気大学内に出来るとよいのではないかと考えています。

(インタビュアー:山縣、泉)

● 関連ホームページ ●

サステナビリティ学連携研究機構(IR3S):

<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/>

地球持続戦略研究イニシアティブ(TIGS):

<http://tigs.ir3s.u-tokyo.ac.jp/>

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線21385)

グループ演習で、実際の事業化プランの難しさを体験！ 第5期アントレプレナー道場の中級コースが始まりました



A～Eグループ(1グループ約10名)に分かれて、事業化プランを発表する受講生たち。この日は、大学・大学院における起業家教育の一つのモデル講義として、経済産業省を始めとする起業家教育関係者およそ20名が見学に訪れた。

7月7日(火)より第5期アントレプレナー道場中級コースがスタートしました。第1回目の講義には、18時半という遅い時間の開始にもかかわらず、初級ビジネスサマリーの審査に合格した約50名の受講生が参加し、各務茂夫教授(事業化推進部長)の講義によるケーススタディが行われました。講義は、実際のニュースに基づいて食の安全をテーマにしたケースが課題として提示され、各グループ約1時間で事業化プランを作成しました。グループ発表では持ち時間7分で代表者が発表すると、講師や他の受講生から「誰の問題を解決するビジネスなのか」「信頼性の担保に必要な条件は何か」などの質問が相次ぎ、予定時間を超過するほど活発な議論が繰り広げられました。全グループの発表後、「事業化の前提となる基本認識」「新事業が成功するための本質的要件」が述べられると、受講生が熱心にメモを取り、大きくうなずく姿も見受けられました。受講生は中級コースの最後にチームを作り、8月30日(日)までにビジネスプランを提出します。その中から更に選抜された上位チームが9月からの上級コースへと進級し、10月のビジネスプラン最終発表審査会に臨むこととなります。

Crossroad:

交差道路や、道が交差するところにある集会場を意味します。産業界と研究者のクロスする場所の意味をこめます。

東京大学産学連携協議会主催 第16回科学技術交流 フォーラムのお知らせ

日時: 9月7日(月)

13:00～17:35

(交流会17:45～)

会場: 【フォーラム】東京大学

山上会館2階大会議室

【交流会】東京大学

山上会館1階ラウンジ

テーマ: 複雑系科学技術

～複雑さに挑み、複雑さを活かす科学技術へ向けて～

定員: 150名/事前申込制

申込: 以下のWEBサイトより

先着順

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/kyogikai/forum/>

申込締切: 9月2日(水)

参加費: フォーラム無料、交流会3千円

【お願い】最近、定員を超える参加のご希望が続いております。登録なしでの当日参加は難しい状況ですので、必ず事前登録をお願い申し上げます。

Column

東大発ベンチャー企業におじゃましま～す!

今回より、産学連携本部の大学発ベンチャー支援施設に入居されているベンチャー企業を1社ずつご紹介します。第1回目は、駒場連携研究棟インキュベーションルームに入居しているペプチドリーム株式会社を訪問しました。

駒場連携研究棟5Fにある本社を訪れると、明るいオフィスの中に大きなテーブルがおりてあり、とても自由な雰囲気を感じました。

ペプチドリーム株式会社は、菅裕明教授(東京大学先端科学技術研究センター)が開発した、世界初の人工RNA触媒(フレキシザイム)の技術をもつ大学発ベンチャーです。従来のバイオベンチャーと大きく異なる点は、製薬メーカーと共同で開発を行う独自のビジネスモデルのため、創薬研究の初期段階から資金提供を受けられ、さらに開発ステージごとにマイルストーン契約金が入ることです。会社設立3年目で累積黒字を達成し、経済産業省委託調査の平成20年度産業技術調査「光る大学発ベンチャー20選」にも選ばれました。

窪田規一社長に大学発ベンチャーが成功する条件を伺いました。「事業がうまくいくための条件は3つ。1つ目は世界に通用する知財技術があること。2つ目はその知的財産を元に組み立てられたビジネスモデルがあること。3つ目は技術開発者と経営者がうまくコミュニケーションをとり、共通の目的のために協力し合うことです」

将来、オリジナルの創薬をめざすペプチドリームのみなさんからは、和気藹々とした雰囲気の中にも、仕事に対する活気が感じられました。

ペプチドリーム株式会社



代表取締役社長: 窪田規一

本社: 東京大学 先端科学技術研究センター-CCR棟512号

設立: 2006年7月 事業内容: 医薬品候補の探索等

資本金: 1億500万円 URL: <http://www.peptidream.com/>



取締役であり、技術開発者の菅裕明教授(写真右)と窪田規一社長(写真上中央)を囲むペプチドリーム株式会社のみなさん

連絡先: 産学連携本部(本部産学連携グループ)

電話: 内線22857(外線03-5841-2857)

WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo

ワタシのオシゴト

第42回

Rings around the UT

先端科学技術研究センター
 事務部企画調整チーム（企画調整担当）

吉村 美都子さん

インタープリターズ・ バイブル

vol. 25



科学技術振興調整費新興分野人材育成科学技術インタープリター養成プログラム

インタープリターかメディエーターか

村上 陽一郎

科学技術インタープリター養成プログラム 特任教授

科学技術インタープリター養成プログラムの禄を食んでいながら、いまさらこんなことを書くのは、大変気が引けるのだが、「インタープリター」という語には、僅かながら不満がある。言うまでも無く、<interpret>という英語は、先ずは「説明し、解釈する」意味であり、例えば「作曲家の書いた楽譜を、自分の解釈を施して演奏する」ことも、あるいは「作家の書いた戯曲中の登場人物の像を、自分の解釈を施して演ずる」ことも、その最も正当な使い方である。さらには、精神分析医が、クライアントの述べる夢を「解釈し、判断する」場合にも、この語が用いられる。「通訳する」という意味は、派生的に現れるものである。「通訳する」場合には、例えば日本語—英語の通訳であれば、日本語の話し手の話す日本語を英語に置き換えて伝えると同時に、英語の話し手の話す英語を日本語に置き換えて伝える、という相互的な働きをするのが普通であるが、上の一義的な意味の場合、つまり「説明し、解釈する」行為は、どちらかといえば一方的である。すでに楽譜や脚本、あるいはクライアントの夢は、すでに前提として存在しており、それを如何に解釈して伝えるか、というところに眼目がある。その前提に立つと、「科学技術インタープリター」というのは、科学技術の内容は既存、既知のものとして存在し、それをインタープリターは、自分流に解釈を加えながら、他人に伝える役割を演じる人、ということになるだろう。無論、現代のように、科学や技術が極度に専門化し、その高度な内容は、当該の専門家集団に属する比較的少数の専門家の間でのみ、理解され、流通しているような状況の下にあっては、そうした専門的知識を、非専門家に判るような流儀に解釈した上で伝えるという機能は、極めて重要になる。JSPSiに先端科学シンポジウム(FoS)と呼ばれる行事があって、ここ暫くお手伝いしている。この行事は、日米、日独、日仏の二国間で恒常的に行われる。当該国で、物理学、地球科学、生命科学など、八種くらいのジャンルから選ばれた、原則四十五歳以下の若手第一線の研究者が、四十人程度一堂に会して、自分の研究内容を英語で発表し、討論する。同じ科学者どうしてさえ、分野の異なる相手に、理解できる言葉で伝えることの難しさがよく判る。実際、研究者は、同じ領域の専門家の集まる学会で発表するテクニクは、先輩格の研究者が教えられるが、そうでない場合のコミュニケーションの方法に関してはどこでも教えられない。FoSiは、そうした点で、極めて大切な教育的効果を持っていると感じてきたし、東京大学に置かれた本プログラムも、これまでの理工系の教育に欠けていた、そうした点を改善するためのプログラムなのだ、と考えれば、それはそれで、意義深い試みであるに違いない。ただ私は、非専門家と専門家との間の双方向のコミュニケーションを可能にする能力を養成するプログラムと考えたいので、むしろメディエーターという言葉、つまり「なかだち役」という語感の方が好ましいか、と思ったりもするのである。

時は流れ・・・(6年目の夏に思うこと)

2004年の着任当初は、業務量の多さ、人の異動の頻繁さ、初めての総務・人事の業務に圧倒され、右往左往ばかりでした。昨年育児休業から復帰しましたが、以前より随分業務が整理され、円滑になった気がします。各方面での制度・組織改革や情報化の推進（カンパニーや先端研システムの整備、全学の人事制度の見直し、チーム制の導入等）のお陰で、



事務室にて

こういうことは男女共同参画にも良い効果があるのかも？と思う今日この頃です。復帰前は不安もありましたが、周囲の方々の温かいフォローもあり、大変よい状況で再スタートを切らせていただきました。4月から、総務・情報管理室担当となり、先端研内の情報共有の更なる推進と、蓄積した情報（＝組織の宝）をいかに管理・継承するかを自分なりのテーマに、色々模索中です。

平日はバタバタですが、休日は3歳の息子とカフェに行ったり、電車を見ながらシャボン玉をしたり。慌ただしい日々の活力となっています。



同期女子の加藤さん、W佐藤さんと

得意ワザ：得意ワザとは違いますが [調理器具オタク]です。電気フライヤー、保温鍋、折込チラシのフライパン&圧力鍋、ニンニクのみじん切り器など。あれこれ試すのが好きです。

自分の性格：面倒くさがり屋

次回執筆者のご指名：青木麻実子さん

次回執筆者との関係：苦楽を共にした同期です。

次回執筆者の紹介：器用でしっかり者の女性です。お手製の石鹸&化粧水はとても使い心地がよかったです。愛犬ゼルビーノちゃんに早く会いたい！

コミュニケーションセンターだより No.59

■観蓮会でコミュニケーションセンター出張出店!



千葉県の検見川にある東京大学の緑地植物実験場にて一年に一度の観蓮会が開催され、今年もコミュニケーションセンターのテントを出店させて頂きました。

蓮の開花時間が早いので、なんと朝の5時から大声を張り上げ、スタッフ共々PR!!観蓮会にぴったりの【蓮香オードパルファム】は今年も大好評でした。

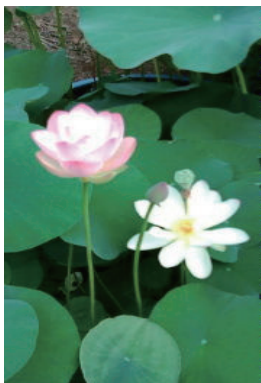
また、初めて出店した年(もう4年前になります...)に比べ、観蓮会にいらっしゃる方の人数も倍以上に!!高齢の方から小さなお子様まで年齢問わず、大変に賑わっていました。

普段のお店での営業形態とは違い、地域の方々との触れ合いや、その土地のお話なども聞くこともでき、充実した一日になりました。



■今年の蓮

残念ながら、今年は大賀一郎博士の研究により開花した大賀蓮は咲いておらず、見る事が出来なかったのですが、他の蓮もとてもきれいに元気よく咲いていましたので、以下の写真(左)にて皆さんに紹介したいと思います。



蓮香オードパルファム:2100円(税込)
蓮香あぶらとりがみ:420円(税込)

(担当:コミュニケーションセンター 山下)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN: 月曜~土曜 10:30~18:30
電話: 03-5841-1039
<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>



ケータイからみた東大 ~東大ナビ通信~



東大ナビとは?

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください!



ケータイでお得なイベント情報をGET!
詳しくは utnav.jp にアクセス。
または mail@utnav.jp に空メール!
東京大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信!

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力!

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了!

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- <http://utnav.jp>にアクセス
 - イベント掲載フォームから送信!
 - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで!
- 内線: 27823
 - メール: info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
 - オフィス: 本郷キャンパス 第二本部棟403号室

INFORMATION

お知らせ

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コースのご案内

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを開催しています。

9月は限定コースとして、Westlaw International / Westlaw Japan の特別コースと、人気の高い「文献リストをサクッと作成」・「文献検索早わかり」コースを各2回開催します。

どのコースもパソコンを使って、実習できます。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。お気軽にご参加ください。

■自宅から検索するには？（ワンポイント講習会）

9/14（月）12:10～12:30

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCSアカウント認証によるSSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■文献リストをサクッと作成～RefWorksを使うには～

9/15（火）15:00～16:00

9/30（水）11:00～12:00

Web上で使える文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

■文献検索早わかり

9/16（水）15:00～16:00

9/29（火）13:30～14:30

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種文献の探し方を、まとめてコンパクトに実習します。（*SSL-VPN Gateway サービスによる、自宅からの利用方法の説明も含まれます。）

■Westlaw International / Westlaw Japan

特別コース【今回限定】

9/29（火）15:00～16:30

世界の判例・法令等に関する情報を網羅したデータベース「Westlaw International」および日本法の総合データベース「Westlaw Japan」についての今回限定コースです。提供元より講師を招いて開催します。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●参加費：無料

●予約不要

各回先着12名。直接ご来場ください。

●いつでも・どこでも。オーダーメイドの出張講習会 随時受付中！

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。卒論指導や進学予定者のガイダンスなど、授業の1コマや、ゼミなどにいかがですか？ ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡ください。（無料）

出張講習会については、下記サイトをご参照ください。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

●講習会やデータベース情報などを見逃さないために。Litetopi メールマガジン発信中。

当係発行のLitetopi（リテトピ）メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記までメールでご連絡ください。（無料）

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649（内線：22649）

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

第36回分子薬物動態学教室ミニシンポジウム

第36回ミニシンポジウムでは“Role of translational drug metabolism and transporter research in new drug discovery and development”と題しまして、ヒトにおける医薬品の体内からの排泄を担う代謝酵素、薬物トランスポーターに焦点をあてます。

ヒトにおける体内動態特性、個人間変動や薬物間相互作用などのリスクを、医薬品開発の初期において予測することが重要であることは、すでに周知の通りです。in vitro 試験系としてヒト組織を用いることで大きく予測性が改善した部分もありますが、未だ動物試験の結果をそのまま当てはめるしかない部分もあり、克服すべき課題となっています。

本シンポジウムでは、当研究室におけるヒト体内動態予測のための最近の基礎研究の成果とマイクロドージングを用いた実証研究をご紹介しますとともに、国内外の製薬企業において第一線で体内動態予測に取り組んでいる研究者を講師としてお招きし、製薬企業における取り組みと展望をご紹介します。

今後、どのような方向でヒト体内動態、さらには薬効・有害作用の予測へと展開させていくのか、皆様とともに議論していきたいと思えます。

日時：9月17日（木） 9：30～17：40

会場：本郷キャンパス 理学部1号館 小柴ホール

主催：東京大学大学院薬学系研究科分子薬物動態学教室

共催：東京大学G-COE「学融合に基づく医療システムイノベーション」

協賛：Capsugel Japan、日本薬剤学会、日本薬物動態学会、東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点

定員：200名

参加費：～8/31 一般1000円 学生・ポスドク無料

9/1～ 一般2000円 学生・ポスドク500円

申し込み方法：下記サイトからお申し込みください。

<http://www.f.u-tokyo.ac.jp/~sugiyama/Symposium/090917/symposium090917.html>

講演は英語で行います。

9：30～9：35 Opening Remarks

9：35～10：15 Yuichi Sugiyama, The University of Tokyo

Effective Use of Microdosing and PET Studies in New Drug Discovery and Development

10：15～10：40 Hiroyuki Kusahara, The University of Tokyo

Characterization of Drug Transporters in Blood Brain Barrier and Renal Epithelia : Use of Gene KO Mice

10：40～11：05 Kazuya Maeda, The University of Tokyo

Prediction of the Hepatic Clearance of Transporter Substrates from In Vitro Experiments

11：05～11：45 Discussion

11：50～13：00 Lunch

13：00～13：35 Jinding Huang, National Cheng Kung university Medical College

How will CYP3A5 genotypes affect inter-individual and inter-ethnic variation of drug disposition and development?

13：35～14：10 W. Polli, GlaxoSmithKline, Inc.

Clinical Drug and Toxicological Interactions Involving Drug Transporters : A Case Study of Lapatinib

14：10～14：45 Jasminder Sahi, Invitrogen

Use of Human Hepatocytes in Predicting Metabolism and Transport of Drug Candidates

14：45～15：20 Saeho Chong, Bristol-Myers Squibb

Challenges in Optimization of ADME Properties of New Drug Candidates

15：20～15：45 Noriko Okudaira, Daiichi Sankyo Co., LTD.

Evaluation of Enzyme and Transporter Mediated Drug-Drug Interactions

15：45～16：10 Recess

16：10～16：35 Minoru Tsuda-Tsukimoto, Mitsubishi Tanabe Pharma Corporation

Effect of Genetic Polymorphism of CYPs and Drug Transporters on the Pharmacokinetics of Organic Anions

16：35～17：00 Makiko Kusama, The University of Tokyo

In Silico Classification of Major Clearance Pathways of Drugs Based on Physicochemical Properties : How Can Pharmaceutical Industries and Regulators Use this Approach in Drug Evaluation?

17:00 ~ 17:40 General Discussion

18:00 ~ 20:00 Reception in the Sanjo Kaikan

お問い合わせ:

hseizai2@mol.f.u-tokyo.ac.jp 又は 03-5841-4770

東京大学大学院薬学系研究科分子薬物動態学教室
楠原、宮本まで。

お知らせ

大学院工学系研究科・工学部

「第24回東京大学工学部・工学系研究科技術発表会」開催のお知らせ

工学部・工学系研究科では、本年度も「技術発表会」を下記のとおり開催いたします。この発表会は技術系職員が職務上で得た技術的知見を発表し討論を行うことによって、相互技術交流を活性化させることを目的としております。是非ご参加下さるようお願い申し上げます。

日時: 9月29日(火) 10:00 ~ 17:30

会場: 工学部2号館 221号講義室

内容: 特別講演「大学における技術開発と産学連携」

影山和郎教授

(前技術部長、工学系研究科技術経営戦略学専攻)

口頭発表、ポスター発表

参加費: 無料(懇親会 2,000円)

問合せ先: 技術発表会事務局

E-mail: 2009tse@tse.t.u-tokyo.ac.jp

<http://www.ttc.t.u-tokyo.ac.jp/>

読者投稿写真 No.1



駒場14号館より日食を見る
(撮影:総合文化研究科 学術研究員 三津間康幸さん)

	氏名	異動内容	旧（現）職等
(退職)			
21.7.31	武内 巧	辞職	大学院医学系研究科准教授
21.7.31	藤島 実	辞職（広島大学大学院先端物質科学研究科教授）	大学院工学系研究科准教授
21.7.31	山田 亮	辞職（京都大学大学院医学研究科教授）	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター准教授
(採用)			
21.8.1	秋山 昌範	政策ビジョン研究センター教授	
21.8.1	鹿島 久嗣	大学院情報理工学系研究科准教授	
21.8.1	牧野 浩志	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター准教授	九州地方整備局長崎河川国道事務所長
(昇任)			
21.7.16	西山 伸宏	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター准教授	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター講師
21.7.16	大澤 幸生	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
21.7.16	山下 真司	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
21.7.16	山口 和也	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
21.7.16	DODBIBA GJERGJ	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科助教
21.7.16	小川 桂一郎	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.7.16	齋藤 兆史	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.7.16	長木 誠司	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.7.16	DE VOS PATRICK HENRI	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.7.16	安岡 治子	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
21.7.16	清水 久芳	地震研究所附属海半球観測研究センター准教授	地震研究所附属海半球観測研究センター助教
21.8.1	駒木 文保	大学院情報理工学系研究科教授	大学院情報理工学系研究科准教授
21.8.1	大岡 龍三	生産技術研究所教授	生産技術研究所准教授
21.8.1	岸 利治	生産技術研究所教授	生産技術研究所准教授

* 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

- ① **テーマの選定**
 全学の教職員を読者対象とするテーマを選定。まずは、本部広報グループに気軽にご相談ください。
- ② **内容・構成の決定**
 執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）の打ち合わせでページ内容を決定します。
- ③ **原稿の執筆**
 決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。
- ④ **ビジュアル要素の提供**
 写真・図・イラストを提供していただきます。
- ⑤ **デザイン**
 執筆部署または編集スタッフがページデザインを作ります。
- ⑥ **校正**
 文字校正を行なっていただきます。
- ⑦ **完成**
 刷り上がった学内広報は執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

期日を申しますので、ご協力をお願いします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
 TEL：03-3811-3393 内線：22031
 E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

あなたの撮った写真を学内広報に載せませんか？

学内広報では教職員の皆さんが撮影した写真を募集します。あなたも自らの写真の腕を学内で披露してみませんか？

■応募条件

1. **東大のキャンパス内で撮影した写真であること**
 本郷に限らず、東大の敷地内ならどのキャンパスでも可。また、キャンパス内で撮った写真であれば、風景写真でなくても可。人、動物、モノが写った写真でもかまいません。
2. **デジタルデータで送付すること**
 撮影はデジタルカメラ、あるいはカメラ付き携帯電話で行い、デジタルデータ(jpeg、tifのいずれか)をメール添付で送ってください。
3. **1回の応募につき3枚まで受付**
 多量の写真データ送付はご遠慮ください。
 (添付ファイルの合計容量は5MBまで)

■掲載基準&掲載方法

学内広報編集スタッフが独断と偏見に満ちたセレクション(笑)を行い、スペースの空いたページに掲載します。掲載の際には、「作品名」と「撮影者」のクレジットを記載します(匿名希望も可)。また、良い写真が多数集まった場合は、応募写真を紹介する特集、応募写真を紹介する連載なども予定しています。

■締切

特にありません。良い写真が撮れたら送ってください。

■送付先

本部広報グループ広報企画チーム
 「学内広報写真募集係」まで。
 E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

平成21年度 学内広報発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1390	8月 28日(金)	9月 17日(木)	9月 28日(月)
1391	10月 1日(木)	10月 23日(金)	10月 29日(木)
1392	10月 29日(木)	11月 20日(金)	11月 27日(金)
1393	学生生活実態調査号		
1394	11月 25日(水)	12月 17日(木)	12月 24日(木)
1395	1月 6日(水)	1月 25日(月)	1月 29日(金)
1396	1月 29日(金)	2月 19日(金)	2月 25日(木)
1397	2月 25日(木)	3月 19日(金)	3月 26日(金)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】

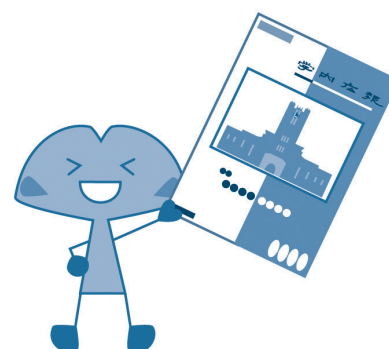
問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393

内線: 22031

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp





「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

作成例

本部広報グループ

「キャンパスツアー」スタート!

本学学生がツアーガイドとなって、赤門や大講堂(安田講堂)、三四郎池、総合図書館など、本郷キャンパス内の名所旧跡を案内する「キャンパスツアー」が今年も始まった。キャンパスツアーは昨年度から実施されており、「ジュニアTA制度」に基づき応募した学生が、東京大学の歴史や学生生活のエピソードを交えながら、約2時間にわたり案内する。

今年度のスタートとなった5月14日(土)には、午前、午後合わせて43人が参加し、ツアーガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。



広報センター前で説明するガイドとそれを聞く参加者

ツアーには、高校生以上であれば誰でも無料で参加することができる。今後のツアーは、五月祭期間や年末年始、入試期間を除く授業期間の土曜日と日曜日(10:00~12:00、14:00~16:00)に行われる予定である。



正門から大講堂に続く銀杏並木

記事の冒頭に**部局名**を記載

簡潔で分かりやすい**タイトル**を記載

- ・過去の報告記事(ニュース)では「**である調**」を用いる
- ・今後のお知らせ(インフォメーション)では「**ですます調**」を用いる

日付には括弧書きで**曜日**をつける

- ・写真を掲載する場合は、25文字以内で**キャプション**(写真の説明文)をつける。写真は3枚程度まで。
- ・原稿とは別に、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを別途送付する(プリントの写真は学内便で送付)

句読点は「、」「。」を用いる

時間は**24時間表記**とする

- ・記事は一行25文字の書式で作成する。
- ・文字数は800字を目安とするが、内容によって増減は可とする。
- ・人物名は**フルネーム**で表記すること。

提出上の注意

1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとして送付すること。
(学内広報担当者の個人アドレスではなく、必ず下記のアドレスに送付してください。)

2. 締切日

HPで発行スケジュールを確認すること。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
トップページ>広報・情報公開>学内広報

問い合わせ先・提出先

本部広報グループ広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393(内線 22031)
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から、必ず**受領メール**をお送りしています(概ね1週間以内)。返信メールが届かない場合は、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、**その際はお問合せ願います**。

担当理事に聞く「タフな東大生」実現のために

学生担当の理事として、いかにして「タフな東大生」を育てていくかという宿題を濱田総長からいただきました。私は、単にタフであるというだけでなく、国内外でリーダーになれる人材を育てることが東大の重要な使命だと感じます。

抽象論だけでは具体案が浮かばないので、まずは東大の学生の実情を把握することから始めたところ、いくつかの傾向があることが見えてきました。それは、学生の7割程度を占める、いわゆる“平均的”な学生がいるとともに、ケアを必要としている学生と、すでにタフで、自ら機会を見つけてたくましく活動している学生がいる、ということです。

これらの学生にはそれぞれ異なった対応をする必要があります。まず、“平均的”な学生には、「東大合格はすごいこと」のような、現在縛られている価値観から脱し、より強くなってほしいと考えています。東大入学はゴールではなく、東大での学びを、卒業後にどう社会に役立てるかこそが目標のはずだからです。そのために、古今東西の名著を読み、一時の流行や思想に流されない、豊かな自分を形成してほしいと思います。東大教

員の出版した本を題材に、著者の先生を招いてイブニングトークを行うなど、名著に触れるきっかけを増やすことを考えています。

ケアを必要としている学生には、学部・専攻レベルでの相談体制の確立、初年次活動センターの更なる充実などが考えられます。東大に入学したはいいが、周りがみんな賢く見えて自分が惨めに感じる。そういう学生が、きちんと自分の存在を認められるように様々な方法でケアをしていきます。

すでにタフな学生には、さらにたくましくなってもらおうと、世界をもっと知ってほしいと考えています。**現状でも行われている1～2週間程度の国際交流**にとどまらず、もっと踏み込んだ議論ができるような仕組みを考えます。また、格調高い英文を書く能力や、ヨーロッパとアジアの言語を一つずつ、コミュニケーションが取れる程度には身に付けてほしいと思います。言語というツールを通して世界の一流を知れば、自ずと謙虚になれるはずで

「タフな東大生」とは、一言で言えば、「リーダーとしての資質を持った学生」



です。その資質を身に付けるには、「**討議力**」を涵養することが重要だと感じています。組織の将来を見据えてどういう方向に舵を切るか決める際には、専門性と教養の両方を兼ね備えていることが必要で、東大にはそういった人材の輩出が期待されているのです。ここで言う「教養」とは、明治以来の、エリートが自分を高めるための自己沈潜的な教養ではなく、討議力を通して自らの教養を組織全体に波及させるような教養のことです。様々な価値観との出会いを通して、視野が広く、威張らず、見下さない、そんなリーダーを育てていきたいと思っています。

【小島憲道 理事（副学長） 談】

What's going on?

「行動シナリオ」

vol. 1

「行動シナリオ」の策定に向けた様々な動きを、学内広報で紹介していく予定です。

HCAP (Harvard College in Asia Program) や京論壇、BESETOHA学生パネルなど、学生が自主的に取り組む国際交流プロジェクトが複数存在している。

大学の経費（外部資金を含む）で海外に短期間派遣された学生数は平成19年度で2,010人。本学に届出のうえ、海外留学している学生は平成20年5月1日現在で388人(学生総数の1.4%)。

教養教育の達成度についての調査(平成21年3月)によれば、「あなたは教養学部での学習を通して、他者と討論する力が、どの程度身についたと思いますか?」という質問に対し、76.8%の学生が「身につかなかった、あまり身につかなかった」と回答している。

教育ジャーナリスト・中井浩一氏講演会

7月23日(木)17時より、教育ジャーナリストの中井浩一氏をお招きし、「行動シナリオ」の策定に向けた第2回のヒアリングが本部棟12階大会議室で実施された。

中井氏は、国立大学法人化の結果、大学が応答なしに社会と向き合うことになったと指摘。社会をリードしていけるか、社会の「下請け」に成り下がってしまうのか、各大学の力



「東大の成績は60～70点。でも他大が30～40点なので結果として『一人勝ち』と言われる」と評する中井氏。

「教育・入試がなおざりでは？」

量がはっきりと出てくる時代になったとの認識を示した。その上で、学問の自由・学部自治といった原理原則として確立してきたものが、なし崩し的に壊れてきている現状に言及し、佐々木毅総長(当時)が法人化を前に評議会(当時)の信任を求めたことについて「賛否両論あるだろうが、原理原則に基づく行動だった」と述べた。

また、「教育・研究・社会貢献」が大学の果たす主要な役割として語られている現状について、「教育・研究以外による社会貢献がありうるのか?」と指摘。「事実上、トップリーダーを教育しているのは東大」として、そのことを前提に東大が果たす教育の役割を考えるべきだとした。さらに、近年の高校生の気質が大幅に変化していることに触れ、研究者になるための教育以前に自ら主体的に考えられる教育をすべきだと指摘すると同時に、そもそも大学院重点化による研究重視の傾向と法人化による忙しさが相まって、教育・入試がなおざりになってはいないかと警鐘を鳴らした。

「行動シナリオ」へのご意見を募集します!

「行動シナリオ」へのご意見やご提言、ご質問などを受け付ける専用メールアドレスを開設しました。

学内教職員のみなさんのご意見を、奮ってお寄せください。

(お寄せいただいたご意見等は「行動シナリオ」の策定にあたって活用させていただきますが、原則として個別にはご返信できませんのでご了承ください。)

宛先はこちら:

k-scenario@adm.u-tokyo.ac.jp

連絡先: 本部企画グループ(内線22393)
kikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

Contents

特集

- 02 高校生のためのオープンキャンパス 2009 開催
05 役員就任・退任の挨拶

NEWS

一般ニュース

- 06 本部国際企画グループ
「潘基文国連事務総長と学生とのタウンミーティング」開催される
- 06 本部環境安全グループ
「安全講演会」、開催される
- 07 地球観測データ統合連携研究機構
第3回データ統合・解析システム (DIAS) フォーラムを開催
- 08 海洋アライアンス
第4回東京大学の海研究「海の現在と明日」開催される
- 09 本部留学生支援グループ
平成21年度第1回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」が開催される
- 09 学生相談ネットワーク本部
第3回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を開催
- 10 海洋アライアンス
第5回イブニングセミナー開催
- 10 本部環境安全グループ
「安全衛生パトロール」実施される

部局ニュース

- 11 大学院法学政治学研究科・法学部、大学院公共政策学教育部
留学生見学旅行を実施
- 12 大学院工学系研究科・工学部、大学院情報理工学系研究科
工学系等地震訓練が行われる
- 13 史料編纂所
ロシア国立海軍文書館長を招いて国際研究集会を開催
- 14 大学院農学生命科学研究科・農学部
農学生命科学図書館本館リニューアルオープン
- 14 大学院総合文化研究科・教養学部
日韓合同セミナー開催
- 15 医学教育国際協力研究センター
第4回学生のための国際協力ワークショップを実施

◆ 表紙写真 ◆

オープンキャンパス風景
(2ページに関連記事)

コラム

- 16 発掘！総長室総括委員会 第15回
17 Crossroad～産学連携本部だより～ vol.45
18 インタープリターズ・バイブル vol.25
18 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第42回
19 コミュニケーションセンターだより No.59
19 ケータイからみた東大～東大ナビ通信～

INFORMATION

お知らせ

- 20 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス”各種コースのご案内
- 21 大学院薬学系研究科・薬学部
第36回分子薬物動態学教室ミニシンポジウム
- 22 大学院工学系研究科・工学部
「第24回東京大学工学部・工学系研究科技術発表会」開催のお知らせ

事務連絡

- 23 人事異動(教員)
26 巻末特別記事
What's going on? 「行動シナリオ」Vol.1

淡青評論

- 28 ライプツィヒ詣

編集後記

早いもので、8月ももう終わりです。今年は夏らしい日も少なく、そして、夏らしいこともあまりしていないなと感じています。さて、実は先月号より、学内広報では、「写真募集」を開始しています!! (皆様、お気づきでしたか?) 今月号にも記念すべき第1号投稿写真を掲載しておりますが、このコーナーは、あなた自身の作品が学内広報に掲載される大チャンスです! 担当者一同、首を長くしてお待ちしていますので、腕に自信のある方もそうでない方も、良い写真が撮れましたら、ぜひ投稿をよろしく願い致します。(り)



七徳堂鬼瓦

ライプツィヒ詣

小さな発見を積み重ねて大きな定理へと帰納する。文学部の研究であっても手順は同じである。ときおり豪快な理論が学界を一度は席卷したように見えても、じつは土台が甘くて瓦解することがあるのもこれまた同じ。ただし対象全体のひろがりには比して個々の対象に挑む研究者の割合が小さいからか、あるいは手続き上どうしても蓋然性にかげざるをえない部分を

含むがゆえか（研究しても儲からないから、ましてや無用だから、とはいいたくない）、学問の進化は自然諸科学のようにはやくはない。

私がこの20年間かけて1冊の本を書くために、いつも立ち戻るべき最初の位置にすえてきた学者（G. ヘルマン）はドイツ・ライプツィヒのひとである。ただし彼の生年は1772 - 1848。あいだにフランス革命をはさんでいる。もっとも彼はライプツィヒの戦いのおりに「紅旗征戎わがことにあらず」であったようだ。

ヘルマンのあと古代ギリシャの韻律理解を大きく前進させたP. マース（1880 - 1964）はベルリン大学で教育を受けたあと、東プロイセンのケーニヒスベルクの教授だった。彼もまた世間知らずで強制収容所送りは必至、友人の尽力がなければ亡命できずユダヤ人として殺されていたであろう。

先日ライプツィヒにヘルマンを詣でた。といっても遺品は僅かである。ライプツィヒ大学はドイツ統一後、古典文献学の復興に新たにがんばっている。ヘルマンの時代には世界有数の中心地だったのに。それでもケーニヒスベルクよりまだよい。このいまやロシア領となり名前をも失った町には大学があるのか。

自分をヘルマンやマースといった巨人達に比すほどうぬぼれてはいないが、それでも辺境の地にいる私でも、彼らの業績を僅かなりとも引き継ぎ発展させたとの自負はある。200年後に誰か私を詣でてくれないかなあ。しかしそもそも東京に大学は残っているのかしら。

逸身喜一郎（大学院人文社会系研究科・文学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

[訂正]

学内広報において、一部誤りがありましたので訂正いたします。関係部局および関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1388 (2009.7.27)

43 ページ：本文上から5行目

(誤) 1932年9月に～

(正) 1942年9月に～

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1389 2009年8月25日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp